

田山花袋集

杉浦非水装幀

改
造
社
版

昭和五年二月十日印刷
昭和五年二月十三日發行

現代日本文學全集 第十七篇

著者 田山花袋

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二

東京市芝區愛宕下町四ノ四〇番地

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目四十四番地

改造社

振替東京八四〇二二番
電話芝(43) 四三二番

『田山花袋集』目次

巻頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………二

小説篇

蒲	一	兵	卒	團	三
生	四	妻	兒	病	三
幼	三	少	女	路	三
朝	三	線	場	道	三
劇	三	臺	へ	行く	三
燈	三	時	す	ぎ	三
九	二				

孤	獨	二	五
日	曜	日	の
遠	足	三	三
合	歡	の	花
三	三	四	四
ポ	ール	ド	に
書	いた	字	三
を	ば	ら	ん
の	IMAGE	三	四
旅	の	者	三
三	七		
山	莊	に	ひ
と	り	ひ	て
三	七		
出	る	水	三
三	九		
あ	る	僧	の
奇	蹟	四	一
あ	る	小	さ
い	花	四	五
刺	刀	と	三
四	四		
女	の	留	守
の	間	四	六
芍	薬	四	七
四	七		
鸚	鵒	四	七
四	七		
黄	い	麥	四
四	八		

隨筆篇

泉

扉	に	向	つ	た	心	四	九
あ	る	友	に	寄	す	手	紙
五	〇						
痕	跡	五	〇				
廣	い	空	間	五	〇		
人	生	の	一	宿	驛	五	〇
あ	る	小	説	の	中	か	ら
五	二						
僧	房	に	わ	か	る	と	と
五	六						
山	水	小	記	五	〇		
(附)	説	明	と	描	寫	(四	五)
選	擇	(三	五)	欲	望	と	
理	想	(三	三)	人	生	批	判
(四	六)	分	析	(三	五)		
兩	人	間	よ	(三	六)	情	緒
(七	三)	肯	定	？	否		
定	？	寂	々	(三	二)	事	件
(三	三)	俳	人	一			
茶	(三	六)	想	像	と	作	品
(四	三)	デ	カ	ダ	ン	の	
群	(三	六)	細	い	心	理	(三
七)	麥	の	道	、	獨		
步	(四	八)	短	篇	、	本	能
(四	七)	現	實	、	眞	劍	(四
四)	自	然	物	(四	五)	藝	術
家	の	心	(四	九)	自		
然	に	似	た	主	觀	(四	七)
西	鶴	(四	七)	心	理	描	
寫	、	背	面	の	主	觀	(四
七)	自	然	の	描	寫	(五	九)
兩	、	南	の	窓	(四	七)	
年	譜	三					

今に———はくくは好かつ

二二五問題 にしすまらるる

悔める。神 經 質 の 文 學 に

餘り深く入るるは 邪道

かゝる知れざる。 若葉生

小石川の切支丹坂から礦樂水に出る道のら
 だら坂を下りようとして渠は考へた。「これで
 自分、彼女との關係は一段落を告げた。三十
 六にもなつて、子供も三人あつて、あんなこと
 を考へたかと思ふと、馬鹿々々しくなる。けれ
 ど……けれど……本當にこれが事實だらうか。
 あれだけの愛情を自分に注い、は單に愛情
 としてのみで、戀ではなかつた
 數多い感情づくめの手紙――

暴風が潜んで居たのである。機
 すれば、其の底の底の暴風は勿
 妻子も世間も道徳も師弟の關
 破れて了ふであらうと思はれた
 さう信じて居た。それであるの

此の出來事、此から考へると、女は確かに其の
 感情を偽り賣つたのだ。自分を欺いたのだと
 男は幾度も思つた。けれど文學者だけに、此の
 男は自ら自分の心理を客觀するだけの餘裕を有
 つて居た。年若い女の心理は容易に判斷し得ら
 れるものではない、かの温かい嬉しい愛情は、
 單に女性特有の自然の發展で、美しく見えた眼
 の表情も、やさしく感じられた態度も都て無意
 識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の恩毒
 を與へたやうなものかも知れない。一步を譲つ
 て女は自分を愛して戀して居たとしても、自分
 は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、
 かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加
 はるのを如何ともすることは出来まい。いや、
 更に一步を進めて、あの熱然なる一封の手紙、
 陰に陽に其の胸の悶を訴へて、丁度自然の力が
 此の身を壓迫するかのやうに、最後の情を傳へ
 て来た時、其の謎を此の身が解いて進らなかつ
 た。女性性づゝましやかな性として、其の上に
 猶密はに迫つて來ることが何うして出来よう。

人の關係は
 あり、子が
 あればこそ
 り合ふ胸の
 かに法じい
 に遭遇しさへ
 勢を得て、
 一舉にして
 しくとも男は
 二三日來の

さういふ心理からかの女は失望して、今回のや
 うな事を起したのかも知れぬ。
 『兎に角時機は過ぎ去つた。彼女は既に他人の
 所有だ。』
 歩きたがら渠はかう絶叫して頭髮をむしつ
 た。

綜セルの香廣に、麥稈帽、薜蔓の杖をつい
 て、やゝ前のめりにだら／＼と坂を下りて行く。
 時は九月の中旬、残暑はまだ堪へ難く暑いが、
 空には既に清涼の秋氣が充ち波つて、深い碧の
 色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒
 屋、雜貨店、其の向うに寺の門やら裏店の長屋や
 らが連つて、久堅町の低い地には數多の工場の
 煙筒が黒い煙を漲らしてゐた。

其の數多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、
 それが渠の毎日正午から通ふ處で、十餘數ほどの
 の廣さの室の中央には、大きい一冊の卓が据
 えてあつて、傍に高い西洋風の本箱、此中に
 は總て種々の地理書が一杯入れられてある。渠
 はある書籍會社の囑託を受けて地理書の編輯
 の手傳に従つて居るのである。文學者に地理書
 の編輯！ 渠は自分が地理の趣味を有つて居る
 からと稱して進んでこれに従事して居るが、内
 心此れに甘じて居らぬことは言ふまでもない。

後れ勝なる文學上の開歴、斷篇のみを作つて未だに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩悶、青年雑誌から月毎に受ける罵評の苦痛、渠自身は其の他日成すあるべきを意識しては居るものの、中心これを苦に病まぬ譯には行かなかつた。社會は日増に進歩する。電車は東京市の交通を一變させた。女學生は勢力になつて、も自分が戀をした頃のやうな舊式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、戀を説くにも、文學を談ずるにも、政治を語るにも、其の態度が總て一變して、自分等とは永久に相觸れることが出来ないうやうに感じられた。

で、毎日機械のやうに同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪轉機關の屋を撼す音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつくと長い狭い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、東と南に明いた此の室は、午後の烈しい日影を受けて、實に堪へ難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざらざらと心地悪い。渠は椅子に腰を掛けて、野草を一服吸つて、立上つて、厚い統計書と地圖と案内記と地理書とを本箱から出して、さて靜かに昨日の續きの筆を執り始めた。けれど二三日來、

頭腦がむしやくしやくして居るので、筆が容易に書まない、一行書いては筆を留めて其の事を思ふ。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そして其の間に頭腦に浮んで來る考は總て斷片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふと何ういふ聯想か、ハウプトマンの『寂しき人々』を思ひ出した。かうならぬ前に、この戯曲をか女の日課として教へて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フオケラートの心事と悲哀とを教へて遣り度かつた。此の戯曲を渠が讀んだのは今から三年前、まだかの女の此の世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、其の頃から渠は淋しい人であつた。敢てヨハンネスに其の身を比さうとは爲なかつたが、アンナのやうな女がもしあつたなら、さういふ悲劇に陥るのは當然だとしみる、同情した。今は其のヨハンネスにさへなれぬ身だと思つて長嘆した。

流石に『寂しき人々』をか女の教へなかつたが、ツルゲネーフの『ファリスト』といふ短篇を教へたことがあつた。洋燈の光明かなる四疊半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある戀物語に憧れ渡つて、表情あふ眼は更に深い意味を以て輝きわたつた。ハイカラな庇髮、櫛、リボン、洋燈の光線が其の半身を照して、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言ふに言はれぬ香水のかをり、肉のかをり、女のかをり——書中の主人公が昔の戀人に『ファリスト』を讀んで聞かせる段を講釋する時には男の聲も烈しく戦へた。

『けれど、もう駄目だ!』
と、渠は再び頭髪をむしつた。

二

渠は名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生の作に力を盡す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につく、倦き果てて了つた。家が引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外國小説を讀み涉獵つても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の點滴、花の開落などいふ自然の狀態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるやうな氣がして、身を置くに處は無いほど淋しかつた。道を歩いて

常に見る若い美しい女、出来るならば新しい戀を爲たいと痛切に思つた。

三十四五、實際此の頃には誰にでもある煩悶で、此の年頃に詳しい女に、戯るゝものが多いのも、畢竟その淋しさを醫す爲めである。世間に妻を離縁するものも此の年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅ふ美しい女教師があつた。渠は其の頃此の女に逢ふのを其の日の唯一の樂みとして、其の女に就いていろ／＼な空想を逞うした。戀が成立つて、

神樂坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで樂しんだら何う……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したら何う……。いや、それ處ではない、其の時、細君が懐妊して居つたから、不圖難産して死ぬ、其の後に其の女を入れるとして何うであらう……。平氣で後妻に入れることが出来るだらうか何うかなど考へて歩いた。

神戸の女學院の生徒で、生れは備中の新見町で、渠の著作の崇拜者で、名を横山芳子といふ女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのは其の頃であつた。竹中古城と謂へば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えて居つたので、地方から來る崇拜者渴仰者の手紙はこ

れ迄にも随分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に従事したいとの切なる願望。

文字は走り書のすらく／＼した字で、餘程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の下階の室で、其の日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い數尺に餘る手紙を芳子に送つた。其の手紙には女の身として文學に携はることの不甘心、女は生理的に母たるの義務を盡さなければならぬ理由、處女にして文學者たるの危険などを縷々として説いて、幾らか罵倒的の文辭をも挿べて、これならもう愛想をつかして斷念めて了ふであらうと時雄は思つて微笑した。そして本籍の中から岡山縣の地圖を捜して、阿蘇郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を過つて奥十數里、こんな山中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、

それでも何となくつかし、時雄は其の附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辭をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目に更に厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫の入つた西洋紙に横に細字で三枚、何うか將來見捨てずに弟子にして呉れといふ意味が返す／＼も書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然るべき學校に入つて、完全に忠實に文學を學んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずには居られなかつた。東京でさへ――女學校を卒業したものでさへ、文學の價値などは解らぬものなのに、何も彼もよく知つて居るらしい手紙の文句早速返事を出して師弟の關係を結んだ。

それから度々手紙と文章、文章はまだ幼稚な點はあるが、癖の無い、すらく／＼した、將來發達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄は其の手紙の來るのを待つやうになつた。ある時などは寫眞を送れと言つて遣らうと思つて、手紙の限に小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗りつて了つた。女性には容色と謂ふものが是非必要である。容色のわるい女はいくら才があつ

たとしても、地方から來る崇拜者渴仰者の手紙はこれ迄にも随分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に従事したいとの切なる願望。

ても男が相手に爲ない。時雄も内々胸の中で、何うせ文學を遣らうといふやうな女だから、不容色に相違ないと思つた。けれど成るべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の兒の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の産褥で、細君は手傳に來て居る姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懐疑した。姉もああいふ若い美しい女を弟子にして何うする氣だらうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文學者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就いて豫め父親の説を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も嚴格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女學校に學んだこともあるといふ。總領の兄は英國へ洋行して、歸朝後は某官立學校の教授となつて居る。芳子は町の小學校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女學院に入り、其處でハイカラな女學校生活を送つた。基督教の女學校は他の女學校に比して、文學に對して總て自由だ。其の頃こそ『魔風戀風』や『金色夜叉』などを讀んでならんと

規定も出て居たが、文部省で干渉しない以前は、教場でさへなくば何を讀んでも差支なかつた。學校に附屬した教會、其處で祈禱の尊いこと、クリスマス、マスの晩の面白いこと、理想を養ふといふことの味も知つて、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の味下が戀しいとか、故郷が懐しいとか言ふことは、來た當座こそ切實に辛く感じもしたが、やがては全く忘れて、女學生の寄宿生活を此上なく面白く思ふやうになつた。旨味い南瓜を食べさせないといつては、お鉢の飯に醬油を懸けて、賄方を醋めたり、舎監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽に物を言つたりする女學生の群の中に入つて居ては、家庭に養はれた少女のやうに、單純に物を見ることが何うして出來よう。美しいこと、理想を養ふこと、虛榮心の高いこと——かういふ傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女學生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。

一歩くとも時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた。昔の戀人——今の細君、曾ては戀人には相違なかつたが、今は時勢が移り變つた。四五年來の女子教育の勃興、女子大學の設立、庇髮、海老茶袴、男と並んで歩くのをはにか

むやうなのは一人も無くなつた。この世の中に、舊式の丸鬘、泥鴨のやうな歩き振、温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今様の細君を連れて行くの散歩、友を訪へば夫の席に出て洗物に會話を賑がす若い細君、まして其の身が骨を折つて書いた小説を讀まうでもなく、夫の苦悶煩悶に全く風馬牛で、子供さへ満足に育てれば好いといふ自分の細君に對すると、何うしても孤獨を叫ばざるを得なかつた。「寂しき人々」のヨハネスと共に、家妻といふものの無意味を感じずには居られなかつた。これが——この孤獨が芳子によつて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！先生！と世にも豪い人のやうに渴仰して來るのに胸を動かさずに誰が居られようか。

最初の一月ほどは時雄の家に假寓して居た。華やかな聲、艶やかな姿、今迄の孤獨な淋しいかれの生活に、何等の對照！産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫ふ、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚當座に再び歸つたやうな氣がして、家門近く來るとそゝるやうに胸が動い

た。門をあけると、玄關には其の美しい笑顔
色彩に富んだ姿、夜も今迄は子供と共に細君が
いきたなく眠つて了つて、六疊の室に徒らに明
らかな洋燈も、却つて倦しさを増すの種であつ
たが、今は如何に夜更けて歸つて来ても、洋燈
の下には白い手が巧みに編物の針を動かして、膝
の上の色ある毛糸の丸い玉！ 賑かな笑聲が
牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき
女弟子を其の家に置くことの不可能なのを覺
つた。従順なる家妻は敢て其の事に不服をも
唱へず、それらしい様子も見せなかつたが、しか
も其の氣色は次第に悪くなつた。限りなき笑
聲の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の
里方の親戚間などには現に一問題として講究さ
れつゝあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——
軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮して居る姉の
家に寄寓させて、其處から麹町の某女塾に通
學させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過
した。

其の間二座芳子は故郷を省みした。短篇小説
を五種、長篇小説を一種、其他美文、新體詩を數
十篇作つた。某女塾では英語は優等の出来で、
時雄の選擇で、ツルゲネーフの全集を丸善から
買つた。初めは、暑中休暇に歸省、二度目は、神
經衰弱で、時々瘧のやうな痲痺を起すので、暫
し故山の静かな處に歸つて休養する方が好いと
いふ醫師の勧めに従つたのである。

其の寓して居た家は麹町の土手三番町、甲
武の電車を通る土手際で、芳子の書齋は其の家
での客座敷、八疊の間、前に往來の頻繁な道
路があつて、がや／＼と往來の人やら子供やら
で喧しい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さく
したやうな本箱が一間張の机の傍にあつて、其
の上には、鏡と、紅血と、白粉の罐と、今一つ
シユウツカリの入つた大きな罐がある。これは
神經過敏で、頭腦が痛くつて爲方が無い時に飲
むのだといふ。本箱には紅葉全集、近松世話浄
瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買ったツル
ゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未來の
閑秀作家は學校から歸つて来ると、机に向つて
文を書くとき云ふよりは、寧ろ多く手紙を書くの
で、男の友達も随分多い。男文字の手紙も随
分来る。中にも高等師範の學生に一人、早稻田

大學の學生に一人、それが時々遊びに来たこと
があつたさうだ。
麹町土手三番町の一角には、女學生もさうハ
イカラなのが澤山居ない。それに、市ヶ谷見附
の彼方には時雄の細君の里の家があるのだが、
この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、
尠くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの
人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、
妻から常に次のやうなことを聞かされる。
『芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も
言つて居ましたよ、男の友達が来るのは好いけ
れど、夜など一緒に二七(不動)に出かけて、遅
くまで歸つて来ないことがあるんですつて。そ
れや芳子さんはそんなことは無いのに決つて居
るけれど、世間の口が喧しくつて爲方が無いと
云つて居ました。』

これを聞くと時雄は定つて芳子の肩を持つ
で、『お前達のやうな舊式の人間には芳子の遺
ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩い
たり話したりさへすれば、すぐあやしむとか變
だとか思ふのだが、一體、そんなことを思つた
り、言つたりするのが舊式だ、今では女も自覺
して居るから、爲ようと思ふことは勝手にする
さ。』

此の議論を時雄はまた得意になつて芳子にも説法した。「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のやうに依頼心を持つて居ては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るやうな意氣地なしでは爲方が無い、日本の新しい婦人としては、自ら考へて自ら行ふやうにしなければいかん。」から言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露西亞、獨逸あたりの婦人の意志と感情と共に當んで居ることを話し、さて、「けれど自覚と云ふのは、自省といふことをも含んで居るですから、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の造つたことには自分が全責任を帯びる覺悟がなくては。」

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるやうに聞えて、渴仰の念が愈々加はつた。基督教的の教訓より自由でそして權威があるやうに考へられた。

芳子は女學生としては身装が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帯をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の目目を惹くに十分であつた。美しい顔と云ふよりは表情のある顔、非常に美しい時もあるれば何だか醜い時もあった。眼に光りがあつてそれが非常に

よく働いた。四五年前までの女の感情を驅はすのに極めて單純で、怒つた容とか笑つた容とか、三種、四種位しか其の感情を表はすことが出来なかつたが、今では情を巧に顔に表はす女が多くなつた。芳子も其の一人であるとき雄は常に思つた。

芳子と時雄との關係は單に師弟の間柄としては餘りに親密であつた。此の二人の様子は觀察したある第三者の女の一人が妻に向つて、「芳子さんが來てから時雄さんの様子は丸で變りましたよ。二人で話して居る處を見ると、それは二人ともあくがれ渡つて居るやうで、それは本當に油斷がなりませんよ。」と言つた。他から見れば、無論さう見えたに相違なかつた。けれど二人は果してさう親密であつたか、何うか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思へばすぐ沈む。些細なことに胸を動かし、つまらぬことにも心を痛める。戀でもない、戀でも無いといふやうなやさしい態度、時雄は絶えず思ひ惑つた。道義の力、習俗の力、機會一度至ればこれを破るのは帛を裂くよりも容易だ。唯、容易に來らぬはこれを破るに至る機會である。

此の機會がこの一年の間に數回とも二度近

寄つたとき雄は自分だけで思つた。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不慮なこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分は故郷に歸つて農夫の妻になつて田舎に埋れて了はうといふことを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をして居る處へゆくりなく時雄が行つて訪問した時、この二度だ。初めの時雄は時雄は其の手紙の意味を明かに了解した。其の返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱した。穩かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺つて自己の良心のいかに麻痺せるかを自ら責めた。そしてあく朝贈つた手紙は、厭乎たる師としての態度であつた。二度目はそれから二月ほど経つた春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉をつけて、美しい顔をして、火鉢の前にぼつねんとして居た。

「何うしたの、と訊くと、
『お留守番ですの。』
『姉は何處へ行つた？』
『四谷へ買物に。』

と言つて、ちつと時雄の顔を見る。いかにも艶かしい。時雄は此の力ある一瞥に意氣地なく胸を躍らした。二語三語、普通のことを語り合つたが、其の平凡なる物語が更に平凡でないこ

とを互に思ひ知つたらしかつた。此の時、今十五分も一緒に話したならば、何うなつてあらうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶めき、態度がいかにも尋常でなかつた。

『今夜は大變綺麗にしてますね?』

男は態と軽く出た。

『え、先程、湯に入りましたのよ。』

『大變に白粉が白いから。』

『あらまあ先生!』と言つて笑つて、體を斜に嬌態を呈した。

時雄はすぐ歸つた。まあ好いでせうと芳子はたつて留めたが、何うしても歸ると言ふので、名残惜しげに月の夜を其處まで送つて來た。其の白い顔には確かにある深い神祕が籠められてあつた。

四月に入つてから、芳子は多病で蒼白い顔をして神經過敏に陥つて居た。シユウソカリを餘程多量に服しても何うも眠られぬとして困つて居た。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない。芳子は多く薬に頼んで居た。

四月末に歸國、九月に上京、そして今回の事件が起つた。

今回の事件とは他でも無い。芳子は戀人を得た。そして上京の途次、戀人と相携へて東京都嵯峨に遊んだ。其の遊んだ二日の日數が出發と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は戀愛神聖なる戀愛、二人は決して罪を犯しては居らぬが、將來は如何にしても此の戀を遂げ度いとの切なる願望。時雄は芳子の師として、此の戀の證人として一面月下米人の役目を餘儀なくさせられたのであつた。

芳子の戀人は同志社の學生、神戸教會の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前に其の戀の神聖なるを神懸けて誓つた。故郷の親達は、學生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既に其の精神の墮落であると言つたが、決してそんな汚れた行爲はない。互に戀を自覺したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に歸つて來て見ると、男から熱烈なる手紙が來て居た。それで始めて將來の約束をしたやうな次第で、決して罪を犯したやうなことは無いと女は涙を流して言つた。時雄は胸に至大の犠牲を感じながらも、其の二人の所謂神聖なる戀の爲めに力を盡すべく餘儀なくされた。

時雄は悶えざるを得なかつた。わが愛するものを奪はれたといふことは甚だしく其心を暗くした。元より進んで其女弟子を自分の戀人にする考は無い。さういふ明らかな定つた考があれば前に既に二度迄も近寄つて來た機會を攫むに於て敢て躊躇するところは無い筈だ。けれど其の愛する女弟子、淋しい生活に美しい色彩を添へ、限りなき力を添へて呉れた芳子を、突然人の奪ひ去るに任ずに忍びようか。機會を二度迄も奪むことは躊躇したが、三度來る機會、四度來る機會を待つて、新なる運命と新なる生活を作りたといはかれの心の底の微かな願であつた。時雄は悶えた、思ひ亂れた。如くみと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のやうに頭腦の中を回轉した。師としての道義の念もこれに交つて、益々炎を熾んにした。わが愛する女の幸福の爲めといふ犠牲の念も加はつた。で、夕暮の膳の上の酒は夥しく量を加へて、泥鵑の如く醉つて寝た。

あくる日は日曜日の雨、裏の森にざん／＼降つて、時雄の爲めには一倍に鈍しい。樽の古樹に降りかゝる雨の脚、それが實に長く、限りない空から限りなく降つて居るとしか思はれない。時雄は讀書する勇氣も無い、筆を執る勇氣

もない。もう秋で冷々と背中の中の冷たい篠椅子に身を横へつゝ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件から其の身の半生のことを考へた。かれの経験にはかういふ経験が幾度もあつた。一步の相違で運命の唯中に入ることが出来ずに、いつも園外に立たせられた淋しい苦悶、その苦しい味をかれは常に味つた。文學の側でもさうだ、社會の側でもさうだ。戀、戀、戀、今になつてもこんな消極的な運命に漂はされて居るかと思ふと、其の身の意氣地なしと運命のつたないことがひし／＼と胸に迫つた。ツルゲネーフの所謂 Superfluous man だと思つて、其の主人公の儂い一生を胸に繰返した。

寂寥に堪へず、午から酒を飲むと言出した。細君の支度の爲やうが遅いのでぶつ／＼言つて居たが、膳に載せられた肴がまづいので、遂に病癪を起して、自棄に酒を飲んだ。一本、二本と徳利の数は重つて、時雄は時の間に泥の如く酔つた。細君に對する不平ももう言はなくなつた。徳利に酒が無くなると、只、酒、酒と言ふばかりだ。そしてこれをぐい／＼と呷る。氣の弱い下女は何うしたことかと呆れて見て居つた。男の兒の五歳になるのを始めは頻りに可愛がつて抱いたり撫でたり接吻したりして居たが、何

うしたはずみでか泣出したのに腹を立てて、ピシャピシャと其尻を亂打したので、三人の子供は怖がつて、遠巻にして、平生に似もやらぬ父親の赤く酔つた顔を不思議さうに見て居た。一升近く飲んで其の儘其處に酔倒れて、御膳の筋斗がへりを打つのに頓着しなかつたが、やがて不思議なら／＼した節で、十年も前にはやつた幼稚な新體詩を歌ひ出した。

君が門邊をさまよふは
巷の塵を吹き立つる

嵐のみとやおぼすらん。

その塵よりいやはれに

その塵よりも亂れたる

戀のかばねを 曉の

歌を半ばにして、細君の被けた蒲團を着たまま、すつくと立上つて、座敷の方へ小山の如く動いて行つた。何處へ？ 何處へいらつしやるんです？ と細君は氣がきでなく其の後を追つて行つたが、それにも關はず、蒲團を着たまゝ、厠の中に入らうとした。細君は慌てて、「貴郎、貴郎、酔つばらつてはいやですよ。そこは手水場ですよ。」突如蒲團を後から引いたので、蒲團は厠の入口で細君の手に残つた。時雄はふら／＼と危く

小便をして居たが、それがすむと、突如整と厠の中に横に寝てしまつた。細君が汚がつて頻りに掃つたり何かしたが、時雄は動かうとも立たうとも爲ない。さうかと云つて眠つたのはなく、赤土のやうな顔に大きな鋭い目を明いて、戸外に降り頻る雨をぢつと見て居た。

四

時雄は例刻をて／＼と牛込矢來町の自宅に歸つて來た。

渠は三日間、其苦悶と戦つた。渠は性として惑溺することが出来ぬ或る一種の力を有つて居る。この力の爲めに支配されるのを常に口惜しく思つて居るのではあるが、それでもいつか負けて了ふ。征服されて了ふ。此れが爲め渠はいつも運命の園外に立つて苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信賴するに足る人と信じられて居る。三日間の苦しい煩悶、これに兎に角渠は其の前途を見た。二人の間の關係は一段落を告げた。此れからは、師としての責任を盡して、わが愛する女の幸福の爲めを謀るばかりだ。これはつらい、けれどつらいのが人生だ！と思ひながら歸つて來た。門をあけて入ると、細君が迎へに出た。残暑

の印はまだ暑く、洋服の下襟袷がびつしより汗にぬれて居る。それを糊のついた白地の單衣に着替へて、茶の間の火鉢の前に坐ると、細君はふと思ひ附いたやうに、算笥の上の一封の手紙を取出し、

『芳子さんから。』

と言つて渡した。

急いで封を切つた。巻紙の厚いのを見ても、其の事件に關しての用事に相違ない。時雄は熱心に讀んだ。

言文一致で、すら／＼と此上ない達筆。

先生——
實は御相談に上り度いと存じましたが、餘り急でしたものでしたから、獨斷で實行致しました。

昨日四時に田中から電報が参りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですもの、私は何んかに驚きましたか知れませんか。

何事も無いのに出て来るやうな、そんな輕卒な男でないと思つて居ります。一層甚しく氣を揉みました。先生、許して下さい、私、其時刻に迎へに参りましたのです。逢つて聞きますと、私の一

任一什を書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた爲め萬一郷里に伴れて歸られるやうなことがあつては、自分が濟まぬと言ふので、學事をも捨てて出京して、先生にすつかりお打明申して、お詫も申上げ、お情にも鑑つて、萬事圓滿に参るやうにと、さういふ目的で急に出て参つたので御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一什、先生のお情深い言葉、將來までも私等二人の神聖な眞面目な戀の證人とも保護者ともなつて下さるといふことを話しました處、非常に先生のお情に感激しまして、感謝の涙に暮れました次第で御座います。

田中は私の餘りに狼狽した手紙に非常に驚いたと見えまして、十分覺悟をして、萬一破曉の曉にはと言つた風なことも決心して参りましたので御座います。萬一の時にはあの時蟻峨に一緒に参つた友人を證人にして、二人の間が決して汚れた關係の無いことを辯明し、別れて後互に感じた二人の戀愛をも打明けて、先生にお纏り申して郷里の父母の方へも

逐一いつて頂かうと決心して参りましたさうです。けれど此の間の私の無謀で郷里の父母の感情を破つて居る矢先何うしてそんなことを申して遣はされませう。今は少時沈黙して、お互に希望を持つて、専心勉學に志し、いつか折を見つて——或は五年、十年の後かも知れませんが——打明けて願ふ方が得策だと存じまして、さういふことに致しました。先生のお話をも一切話して聞かせました。

で、用事が濟んだ上は歸した方が好いのですけれど、非常に疲れて居る様子を見ましては、流石に直ちに引返すやうにと申兼ねました。(私の弱いのを御許して下さい) 勉學中、實際問題に觸れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座いますが、一先、旅館に到着させまして、折角出て来たものですから、一日位見物しておいでなさいと、つい申して了ひました。何うか先生、お許し下さいまし。私共も深い感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたやうな、假りにも常識を外れた、他人から誤解されるやうなことは致しませ

ん。誓つて、決して致しません。末ながら奥様にも宜しく申上げて下さいまし。

芳子

先生 御もと

この一通の手紙を讀んで居る中、さまざまの感情が時雄の胸を火のやうに燃えて通つた。其の田中といふ二十一の青年が現に此の東京に来て居る。芳子が迎へに行つた。何をしたか解らん。此の間言つたことも丸で虚言かも知れぬ。此の夏期の休暇に須磨で落合つた時から出来て居て、京都での行爲もその望を満す爲め、今度も戀しさに堪へ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん。手を搦つたらう。胸と胸とが相觸れたらう。人が見て居ぬ旅館屋の二階、何を爲て居るか解らぬ。汚れる汚れぬの利那の間だ。かう思ふと時雄は堪らなくなつた。『監督者の責任にも關する！』と腹の中で絶叫した。かうしては置かれぬ、かういふ自由を精神の定まらぬ女に與へて置くことは出来ん。監督せんければならん、保護せんけりやならん。私共は熱情もあるが理性がある！ 私共とは何だ！ 何故私とは書かぬ、何故複數を用ひた？ 時雄の胸は嵐のやうに亂れた。着いたのは昨日の六時、姉の家に行つて聞き糺せば昨夜何時頃

に歸つたか解るが、今日は何うした、今は何うして居る？

細君の心を盡した晚餐の膳には、鮎の新鮮な刺身に、青紫蘇の薬味を添へた冷豆腐、それを味ふ餘裕もないが、一盃は一盃と盡を重ねた。

細君は末の兒を寝かして、火鉢の前に來て坐つたが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を附けて、

『芳子さん、何つて言つて來たのです？』

時雄は黙つて手紙を投げて遣つた、細君はそれを受取りながら、夫の顔をじろりと見て、暴風の前に來る雲行の甚だ急なのを知つた。

細君は手紙を讀終つて巻きかへしながら、

『出て來たのですね。』

『うむ。』

『ずつと東京に居るんでせうか。』

『手紙に書いてあるぢやないか、すぐ歸すつて……』

『歸るでせうか。』

『そんなこと誰が知るものか。』

夫の語氣が烈しいので、細君は口を噤んで了つた。少時経つてから、

『だから、本當に厭さ、若い娘の身で、小説家

になるなんぞつて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね。』

『でもお前は安心したらう、』と言はうとしたが、それは止して、

『まア、そんなことは何うでも好いき、何うせお前達には解らんのだから……それよりも酔でもしたら何うだ。』

温順な細君は徳利を取上げて、京焼の盃に波々と注ぐ。

時雄は頻りに酒を呷つた。酒でなければこの鬱を遣るに堪へぬといはねばかりに。三本目に、妻は心配して、

『此頃は何うか爲ましたね。』

『何故？』

『酔つてばかり居るぢやありませんか。』

『酔ふといふことが何うかしたのか。』

『さうでせう、何か氣に懸ることがあるからでせう。芳子さんのことなどは何うでも好いぢやありませんか。』

『馬鹿！』

と時雄は一喝した。

細君はそれにも驚りずに、

『だつて、餘り飲んでは毒ですよ、もう好い加減になさい、また、手水場にも入つて寝ると、

貴郎は大きいから、私と、お鶴(下女)の手ぐら
るでは何らにもなりやしませんからさ。』

『まア、好いからもう一本。』

で、もう一本を半分位飲んだ。もう酔は餘程
廻つたらしい。顔の色は赤銅色に染つて眼が
少しく据つて来た。急に立上つて、

『おい、帯を出せ!』

『何處へいらつしやる。』

『三番町まで行つて来る。』

『姉の處?』

『らむ。』

『およしなきいよ、危いから。』

「何アに大丈夫だ、人の娘を預つて監督せず
に投遣にしては置かれん。男が此の東京に來て
一緒に歩いたり何かして居るのを見ぬ振をして
は置かれん。田川(姉)の家の姓に預けて置いて
も不安心だから、今日、行つて、早かつたら、芳
子を家に連れて来る。二階を掃除して置け。』

『家に置くんですか、また…』

『勿論。』

細君は容易に帯と着物とを出さうともせぬの
で、

『よし、よし、着物を出さんのなら、これで好
い。』と、白地の單衣に唐縮緬の汚れたへこ帯、帽

子も被らずに、其の儘に急いで戸外へ出た。『今
出しますから…本當に困つて了ふ、』といふ細
君の聲が後に聞えた。

夏の日はもう暮れ懸つて居た。矢來の酒井の
森には鳥の聲が喧しく聞える。何の家でも夕飯
が済んで、門口に若い娘の白い顔も見える。ポ
ールを投げて居る少年もある。官吏らしい、鎧

髭の紳士が、底髪(ひだかみ)の若い細君を伴れて、神樂坂に
散歩に出懸けるのにも幾組か邂逅した。時雄は
激耳した心と泥酔した身體とに烈しく慥はされ

て、四邊に見ゆるものが皆な別の世界のものの
やうに思はれた。兩側の家も、動くやう、地も脚
の下に陥るやう、天も頭の上に蔽ひ冠さるやう

に感じた。元から左程強い酒量でないのに、無
闇にぐいぐいと叫つたので、一時に酔が發した
のであらう。ふと露西亞の賤民の酒に酔つて路

傍に倒れて寝て居るのを思ひ出した。そしてあ
る友人と露西亞の間は是れだから豪い、惑溺
するなら飽迄惑溺せんければ駄目だと言つたこ

とを思ひ出した。馬鹿な! 戀に師弟の別があ
つて堪るものかと口へ出して言つた。

中根坂を上つて、士官學校の裏門から、佐内
坂の上まで來た頃は、日はもうとつぷりと暮れ
た。白地の浴衣がぞろぞろと通る。煙草屋の前

に若い細君が出て居る。水店の障簾が涼しき
うに夕風に靡く。時雄は此の夏の夜景を瞞げに
眼には見ながら、電信柱に突當つて倒れさうに

したり、浅い溝に落ちて膝頭をついたり、職工
體の男に、『酔漢奴! しつかり歩け!』と罵ら
れたりした。急に自ら思ひついたらしく、坂の

上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入つ
た。境内には人の影もなく寂寞として居た。大
きい古い樺の樹と松の樹とが蔽ひ冠さつて、左

の隅に珊瑚樹の大きいのが繁つて居た。處々
の常夜燈はそろそろ光を放ち始めた。時雄は
いかにしても苦しいので、突如其の珊瑚樹の陰

に身を躲して、其の根元の地上に身を横へた。
興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感
とは、極端まで其の力を發展して、一方痛切

に嫉妬の念に驅られながら、一方冷淡に自己の
状態を客觀した。

初めて戀するやうな熱烈な情は無論なかつ
た。盲目に其の運命に従ふと謂ふよりは、寧ろ
冷かに其の運命を批判した。熱い主觀の情と

冷めた客觀の批判とが絡り合せた絲のやうに
固く結び着けられて、一種異様の心の状態を
呈した。
悲しい、實に痛切に悲しい。此の悲哀は華や

かな青春の悲哀でもなく、單に男女の戀の上の悲哀でもなく、人生の最奥に秘んで居るある大きな悲哀だ。行く水の流、開く花の凋落、此の自然の底に蟻れる抵抗すべからざる力に觸れては、人間ほど儂い情ないものはない。

茫然として涙は時雄の顔面を傳つた。ふとある事が胸に上つた。時雄は立上つて歩き出した。もう全く夜になつた。境内の處々に立てられた硝子燈は光を放つて、其の表面の常夜燈といふ三字がはつきり見える。この常夜燈といふ三字、これを見てかれは胸を衝いた。

此の三字をかれは曾て深い懊惱を以て見たことは無いだらうか。今の細君が大きい地割に結つて、このすぐ下の家に娘で居た時、渠は其の微かな琴の音の髣髴をだに得たいと思つてよく此の八幡の高臺に登つた。かの女を得なければ寧ろ南洋の植民地に漂泊しようといふほどの熱烈な心を抱いて、華表、長い石階、社殿、俳句の懸行燈、この常夜燈の三字にはよく見入つて物思つたものだ。其の下には依然たる家屋、電車の轟、こそをりゝ寂寞を破つて通るが、其の妻の實家の窓には、昔と同じやうに、明かに燈の光が輝いて居た。何たる節操なきこそ、僅かに八年の年月を閲したばかりであるのに、

かうも變らうとは誰が思はら。其の桃割姿を丸鬚姿にして、樂しく暮した其の生活が何うしてかういふ荒涼たる生活に變つて、何うしてかういふ新しい戀を感ずるやうになつたか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいを痛切に胸に覺えた。けれど其の胸にある現在の事實は不思議にも何等の動搖をも受けなかつた。

「矛盾でもなんでも爲方がない、其の矛盾、其の無節操、これが事實だから爲方がない、事實！ 事實！」

と時雄は胸の中に繰返した。時雄は堪へ難い自然の力の壓迫に壓せられたものやうに、再び傍のロハ臺に長い身を横たふと見ると、赤銅のやうな色をした光世の無い大きい月が、お濠の松の上に音も無く昇つて居た。其の色、其の状、其の姿がいかに侘しい。その侘しさが其の身の今の侘しきによく適つて居ると時雄は思つて、また堪へ難い哀愁が其の胸に漲り渡つた。

酔は既に醒めた。夜露は置始めた。土手三番町の家の前に来た。覗いて見たが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ歸つて来ぬと見える。時雄の胸はまた燃えた。此の夜、此の暗い夜に戀しい男と二人！

何をして居るか解らぬ。かういふ常識を缺いた行爲を敢てして、神聖なる戀とは何事？ 汚れたる行爲の無いのを辯明するとは何事？

「すぐ家に入らうとしたが、まだ當人が歸つて居らぬのに、上つても爲方が無いと思つて、其の前を眞直に通り返した。女と摩違ふ度に、芳子ではないかと顔を見つゝ歩いた。土手の上、松の木陰、街道の曲り角、往來の人に怪まるゝまで彼方此方を徘徊した。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言つて、さう遅くまで出歩いて居る筈が無い。もう歸つたに相違ないと思つて、引返して姉の家に歸つたが、矢張まだ歸つて居ない。」

時雄は家に入つた。奥の六疊に通るや否、

「芳さんは何うしました？」

「其の筈より何より、娘は時雄の着物に夥しく泥の着いて居るのに驚いて、

『まア、何うしたんです、時雄さん。』

「明かな洋燈の光で見ると、成程白地の浴衣に、肩膝腰の襟ひなく、夥しい泥痕！

「何アに、其處で烏渡轉んだものだから。」

「だって、肩まで粘りて居るぢやありませんか。また、酔ッばらつたんでせう。」